東京大学哲学研究室『論集』37号（2018年度）
pp.66-79

実在の本性に向かって

—スピノザ『エチカ』における外的原因の論理—

笠松　和也

事物の本性と外的原因という対は、スピノザが自らの著作の重要な箇所でたびたび用いた基本的な発想の一つである。初期に書かれた『短論文』では、神と個物の原因性の差異を論じる文脈で、既に次のように述べている。「もし実在が事物の本性に属するならば、われわれがその原因をその本性の外に探究すべきでないことは確実である。他方、もしこうしたものとともにそのようにあるのでなければ、われわれはまさにその本性の外に原因を探究しなければならない」(KV 1/6, 4)。『短論文』の中では、この対は人間の知性や意志の原因、神の実在の証明の仕方、受動の規定、真なる知性と人間の自由の規定等を解明する文脈で用いられる。また、同様の発想は他の著作にも見られ、『知性改善論』では必然性・不可能性・可能性の区別、真なる観念と偽なる観念の区別を論じる文脈、『形而上学的思想』では必然性と不可能性の区別、諸事物の変化の原因、物体と精神の区別を規定する文脈、『神学政治論』では神の助けと導きを説明する文脈に現れる。こうした用例の多さから見ても、外的原因をめぐる発想はスピノザの思考の一つの特質をなしているといえる[1]。

本稿では、主著『エチカ』において、事物の本性と外的原因の対がどのように用いられているのかを分析することを通して、外的原因の発想によって一体いかなる思考が可能になっているのかを解明することを試みる。ただし、外的原因の概念に関しては、『エチカ』に限っても論点が多岐にわたるため、事物の本性と外的原因という対のみに考察の範囲を限定したい[2]。

１．個体の実在の問題

『エチカ』における「外的原因」という語の初出箇所は、第 1 部定理 8 備考 2 の後半部である。この箇所では、定理 5 で証明された「同じ本性をもつ実体は一つであること」について、定理 5 とは別の証明が与えられる。定理 5 では、属性と変状の差異に基づいて証明されたが、ここで焦点となるのは、本質と実在の関

係である。外的原因の概念はこの文脈で導入されることになる。以下、テキストを追いながら、このことを確認したい。

定理 8 備考 2 の後半部では、証明に先立って四つの前提が挙げられる。(1) 事物の真なる定義は、その事物の本性のみを表現する。(2) 事物の定義は個体の数を含まず、またこれを表現しない。例えば、三角形の定義からは、「内角の和は二直角である」といった特質は導き出せる。ところが、「三角形が 10 個ある」といったように、個体としての三角形の数は、三角形の定義からは導き出せない。(3) 実在する各々の事物には、なぜ実在するのかというある一定の原因がなければならない[3]。(4) なぜある事物が実在するのかという原因は、その実在する事物の本性そのものや定義に含まれていなければならないか、その本性や定義の外になければならない。備考 2 における以降の記述では、事物の本性の外にあるこの原因が「外的原因 (causa externa)」と呼ばれる。

そのうえで、これらの前提をもとにして、「同じ本性をもつ実体は一つであること」を証明するのに際しては、まず実体との対比で、個体の場合はどうであるかが示される。それが「20 人の人間の実在」という例である。

> 例えば、もし自然の中に 20 人の人間が実在する(より分かりやすくするため、20 人の人間が同時に実在し、それ以前には自然の中に他の人間が実在しなかったと想定する) としたら、(われわれがなぜ 20 人の人間が実在するのかという原因を与えるためには) 人間本性の原因を一般に示すだけでは十分ではなく、さらになぜ 20 人よりも多くもなく少なくもなく実在するのかという原因を示さなければならない。(E1P8S2)

「20 人の人間が実在する」とは、「21 人以上でもなく 19 人以下でもなく、ちょうど 20 人の人間が実在する」ということである。だが、なぜそのために人間本性以外の原因が必要なのだろうか。上記の箇所に続くスピノザの説明を整理すれば、こうである。先に挙げた前提 (3) より、実在にはなぜ実在するのかという原因が必要である。20 人の人間の実在の場合、なぜ人間がちょうど 20 人実在するのかという原因がなければならない。その原因は、前提 (4) より、人間本性に含まれているか、そうでなければ、人間本性の外に他の原因がなければならない。だが、ここで前提 (2) より、人間本性からは、個体としての人間の数は導き出せない。したがって、20 人の人間が実在する原因は、人間本性の外になければならない。つまり、外的原因が必要である。これを人間以外のすべての個体についても適用

すれば、次のようになる。「ある本性をもった複数の個体が実在しうるならば、それらすべては、実在するために、外的原因をもたなければならない」（E1P8S2）。

これに対して、実体の場合はどうであろうか。問題となるのは、実体の実在も個体の場合と同様に数を含んでいるのかどうかである。まず、実体の実在はその本性に属している。つまり、実体の実在は外的原因なしにその本性から導き出されなければならない。だが、先に挙げた前提（2）から、本性は個体の数を含まない。また前提（3）から、何の原因もなしに個体の数が規定されることはありえない。それゆえ、実体の実在はそもそも数を含まない。言い換えれば、実体については、その複数性を考えることはできない。その意味で、「同じ本性をもつ実体は一つである」と言うことができる。

さて、以上の議論から、『エチカ』第1部における外的原因の概念の性格がいかなるものであるかを考えてみたい。

第一に、外的原因の概念は、事物の本性のみからは導き出されないものの原因として否定的に導入される。その際、外的原因は「事物の本性に対して外的である」という以上の規定を与えられていない。つまり、個々の外的原因が具体的にいかなるものであるかは、ここでは問題とされていない。のちに第1部定理11証明で外的原因の概念が用いられる時も、「物体的自然総体の秩序」（E1P11D2）と言われるのみで、個々の外的原因については語られない。

第二に、外的原因の概念は、本質と実在の関係を論じる文脈で用いられている。実体の場合、本質が実在を含んでいるため、実体の本質からその実在が導き出される。そこには外的原因が介在する余地はない。他方、個体の場合、本質が実在を含んでいないため、個体の本質のみからその実在を導き出せない。必然的に外的原因が要請される。外的原因の概念は、実体における本質と実在の関係と、個体における本質と実在の関係との差異を示す役割を与えられている。

第三に、外的原因の概念は、個体の実在における数の概念と必然的に関わる。というのも、事物の本性が数を含まないならば、数は常に外的原因によって規定されることになるからである。ただし、より厳密に言うならば、これは数だけに関わることではない。数以外にも事物の本性に含まれていないものがあるからである。スピノザはそうしたものとして「数」「大きさ」「時間」の三つとそこから導き出されるものを挙げ、それらを「量」と呼んでいる（Ep12）。個体の実在における量はすべて外的原因によって規定されなければならない。量の概念は外的原因の概念を含意しているのである。

外的原因のこうした性格は、基本的には『エチカ』第2部でも維持される。第

2 部では、外的原因はもっぱら物体の側から「外的物体」として捉えられ、人間身体との相互作用が問題になるが、そこでも人間身体の本性とは異なる本性をもつものとして、外的物体の概念は否定的に導入される。本質と実在の区別は、人間身体の本性と人間身体の変状の区別に置き換えられる。人間身体の本性が量をもたないのに対して、人間身体の変状は量をもつ。それゆえ、外的原因の概念を適用する発想それ自体には大きな差はない。ところが、第 3 部で感情論を展開し始めると、外的原因の発想は別の仕方で用いられることになる。次節では、第 3 部定理 4–6 における「外的原因」の用例を分析することを通して、外的原因の発想がどのように展開されるのかを考えてみたい。

２.『エチカ』第 3 部定理 4–6 の問題

『エチカ』第 1 部において、外的原因の概念は、個体の本質のみからは導き出されないその個体の実在を規定するものとして否定的に導入された。第 3 部においても、外的原因のそうした性格は維持されているように見える。実際、第 3 部定理 4 で「いかなる事物も外的原因なしには破壊されえない」ことを証明する箇所では、次のように言われる。

> 各々の事物の定義は、その当の事物の本質を肯定するが、否定することはない。すなわち、その事物の本質を措定するが、取り除くことはない。したがって、われわれがその当の事物のみに注意を向け、外的原因に注意を向けない間は、その事物のうちには、その当の事物を破壊しうるものを、われわれは見いだすことがありえないだろう。（E3P4D）

外的原因の位置づけに着目して再構成すればこうである。あるものが事物の定義のうちにあるならば、それはその事物の本質にとって肯定的であり、その本質を措定するものである。反対に、その事物の本質にとって否定的なものであり、その本質を取り除くものであれば、それは事物の定義の外、すなわち外的原因でなければならない。確かに、事物の本性のみからは導き出されないものの原因を外的原因として否定的に導入するという論理それ自体は、第 1 部定理 8 備考 2 と共通している。

しかし、ここには二つの疑問がある。一つは、「本質を措定する」や「本質を取り除く」ということで何を意味しているかである。これらが事物の破壊不可能性

と結びつくのは、いかなる意味においてであろうか。例えば、円の定義を「一つの端を固定し、もう一つの端が運動するような線分によって描かれる図形」（TIE 96）とするならば、その定義から導き出されるのは、円の本質と合致する特質だけであり、「頂点をもつ」や「辺をもつ」等、円の本質と矛盾する特質は導き出されない。その意味で、定義は本質を措定するが、取り除くことはないと言える。そのため、円の定義のみから特質を導き出すならば、「四角い円」等、円の本質と矛盾し、円であることを破壊するようなものは生じない。他方、このことは、コンパスで紙に書かれるような個々に実在する円が破壊されるかどうかとは水準が異なっている。というのも、確かに円の定義からは、円の実在を破壊する原因は導き出されないが、そもそも個体の本質は実在を含まないため、円の定義が表す本質のうちには、個々の円が実在しない原因だけでなく、実在する原因も同様に含まれていないからである。つまり、『エチカ』においては、実在しない事物には（a）事物の本性そのものが矛盾する場合と（b）なぜ実在しないのかという外的原因をもつ場合であるが（E1P11D2）、第3部定理4ではこれら二つの場合、すなわち本質の水準における無矛盾性と実在の水準における破壊不可能性が混在しているように思われる。この疑問は、続く定理5で用いられる「同じ基体のうちに存在しえない」という表現についても言うことができる。

もう一つの疑問は、第3部定理6との関係である。定理6は定理4と定理5を参照しながら、次のように証明される。

> 個物は、神の属性がある一定の規定された仕方で表現されるところの様態である（第1部定理25系より）。つまり、（第2部定理34より）それによって神が存在し活動するところの神の力能をある一定の規定された仕方で表現する事物である。そして、いかなる事物も自らのうちに、それによって破壊されうるところの何か、すなわちその事物の実在を取り除く何かをもたず（この部の定理 4 より）、反対にその事物の実在を取り除きうるものすべてと対立する（前定理より）。したがって、できるかぎり、そして自己においてあるかぎり、自己の存在を保持しようとする。（E3P6D）

問題となるのは、なぜ定理4から「いかなる事物も自らのうちにその事物の実在を取り除く何かをもたない」ことが導き出せるのかである。ここには二重の問題がある。一つは、表現上の移行である。定理6証明では、「それによって破壊されうるところの何か」を言い換えて、「その事物の実在を取り除く何か」と言われ

るが、定理 4 証明では「事物を破壊しうるもの」とは「その事物の本質を取り除くもの」であった。定理 4 と定理 6 の間には、「事物の本質を取り除く」という表現から「事物の実在を取り除く」という表現への移行が見られる。こうした移行は、定理 5 から「その事物の実在を取り除きうるものすべてと対立する」ことを導き出す点についても言える。

もう一つは、内容上の移行である。確かに、定理 4 から事物のうちにその事物の実在を取り除く何かが存在しないことは導き出せる。しかし、それは事物の実在を否定するものだからではなく、事物の本質のうちにその実在が含まれないからである。それゆえ、事物のうちには、その事物の実在を否定するものと同様に、その実在を措定するものも含まれない。だとすれば、定理 4 を根拠にして、事物のうちに自己の存在を保持する力があることを肯定的に結論づけることはできないはずである。このことは、定理 5 についても言える。「対立する」という意味が単に「その事物の本質に含まれていない」という意味だとすれば、同様に自己の存在を保持する力があることを結論することはできない。この問題は定理 6 証明の成否にかかっている点で、表現上の移行の問題よりも深刻である。

では、定理 6 証明はどのように解釈できるのだろうか。問題の所在を明確にするため、定理 6 証明の整合性を認める場合、一般にこの証明がどのように解釈されるのかをまず見ておこう。この点については、ヴィルヤネンによる簡潔なまとめがある[4]。彼によれば、証明全体はまず前半で第 1 部定理 25 系と第 2 部定理 34 から、個物と神の力能との関係が定式化された後、後半で第 3 部定理 4 と定理 5 から、個物の本性がもつ形式性が導入されると捉えることができる。その際、前半と後半を総合しなければ、個物が自己の存在を保持する力は導き出すことができない。というのも、前半で神の力能をある一定の規定された仕方で表現する事物として個物を位置づけるとしても、それだけでは個物において働く力能が個物にとって自己保存として働くことは規定できないからである。また、後半で示される個物の本性の形式性からだけでは、個物において力能が働いていることを導き出すことはできない。個物において働く神の力能が、個物の本性の形式性によって枠を与えられることではじめて、個物において自己の存在を保持する力が働いていることが帰結する[5]。

確かにこの解釈は定理 6 証明の論理を整合的に再構成しているように思われるが、重大な問題が一つある。たとえこの解釈を取ったとしても、先に提起した定理 4 と定理 6 における二つの移行の問題は依然として残ってしまうのである。というのも、ヴィルヤネンの解釈を取るならば、定理 6 証明の後半で問題となって

いるのは、まさに個物の実在に対して形式を導入することでなければならないからである。ところが、定理4と定理5で言われていたのは、個物の本質に関する規定である。そのため、これらを根拠に個物の実在に対する形式を導入することはできない。ここで問題となっているのは、個物の本質の性格を示す定理4がいかにして個物の実在の問題に適用できるかということなのである。

３．実在の本性と変状

では、第3部定理4–6は整合的に解釈できないのだろうか。ここで、第2部定理45備考を補助線としてみたい。というのも、この箇所には、第3部定理6で定式化される「個物における自己の存在を保持する力」への言及が既に見いだされるからである。

> 私はここで実在を持続であると解していない。つまり、抽象的に捉えられるかぎりでの実在、いわば何らかの種類の量と捉えられるかぎりでの実在であると解していない。というのは、神の本性の永遠なる必然性から、無限に多くのものが無限な仕方で生じるがゆえに、個物に帰されるところの実在の本性そのものについて、私は語っているからである（第1部定理16を見よ）。つまり、私は神のうちに存在するかぎりの個物の実在について語っている。というのは、たとえ各々の個物が他の個物から、ある一定の仕方で実在するように規定されるとしても、その各々の個物が実在することを保持する力は、神の本性の永遠なる必然性から生じるからである。（E2P45S）

ここでは、個物の実在が2種類に区別されている。一つは、持続としての実在、すなわち量として捉えられる実在である。これは、外的原因としての他の個物から規定されているかぎりの実在であり、個物の実在がいかなる状態であるのかを示す。本稿ではこれを「実在の変状」と呼んでおこう[6]。もう一つは、神のうちに存在するかぎりでの個物の実在であり、「実在の本性そのもの」と呼ばれるものである。これが「各々の個物が実在することを保持する力」として位置づけられる。もちろんこれら両者の差異は、ある一つの個物の実在をどの観点から捉えるかに由来するため、両者は事物として異なっているわけではない。ある個物の実在について、神の力能をある一定の規定された仕方で表現するかぎりの実在として捉えるならば、個物の実在の本性そのものとなり、外的原因から規定されるかぎり

の実在として捉えるならば、個物の実在の変状となる。

こうした実在の区別がわれわれにとって重要なのは、まさにここに事物の本性と外的原因という対が見いだされるからである。もともと第 1 部定理 8 備考においては、この対は個物の本質と実在の区別に適用されていたのに対して、第 2 部定理 45 備考では、その対が個物の実在における区別に適用されることで、個物の実在の本性と実在の変状の区別が導き出されている。事物の本性と外的原因の対は、個物から個物の実在へとその適用範囲を移行させているのである。

この区別を図式化すればこうである。まず、第 1 部定理 8 備考では、「20 人の人間の実在」の例を通して、（A）個物の本質と（B）個物の実在の区別が、事物の本性と外的原因の対によって位置づけられる。そのうえで、第 2 部定理 45 備考では、（B）個物の実在について、さらに（B1）個物の実在の本性と（B2）個物の実在の変状が、同じ対によって区別されていることになる。

これらを原因の観点から見直せば、（A）個物の本質と（B1）個物の実在の本性は、どちらも神の本性の必然性から生じるため、神を原因としている。「神は諸事物の実在の作用因であるだけでなく、本質の作用因でもある」（E1P25）とされるのは、この意味においてである。また、個物の側から見れば、どちらも外的原因に依存しないため、本質と呼ぶことができる。（A）は実在に対する本質であり、「形相的本質（essentia formalis）」（E1P17S）と呼ばれるのに対して、（B1）は実在の本性としての本質であり、「現実的本質（essentia actualis）」（E3P7）と呼ばれる。他方、（B2）個物の実在の変状のみが、外的原因としての他の個物を必要とする。第 1 部定理 8 備考では、本質に対する実在に量の概念が帰されていたが、厳密に言えば、個物の実在が持続ないし量をもつものとして捉えられるのは、実在の変状の水準である。

以上の図式を踏まえて、前節で提起した第 3 部定理 4–6 における問題を考えてみよう。まず、定理 4 では、本質を措定することや取り除くことと、事物の破壊不可能性との関係が問題になっていた。ここには、本質の水準における無矛盾性と実在の水準における破壊不可能性が混在しているのではないかという疑問があった。しかし、いまやこの混在の正体をより明確にすることができる。というのも、定理 4 で言われる「事物の本質」には、前述した二つの意味での本質を読み込むことができるからである。つまり、「事物の本質」を実在に対する本質（形相的本質）という意味として読めば、本質の水準における無矛盾性の問題として捉えられるが、実在の本性としての本質（現実的本質）という意味として読めば、実在の水準における破壊不可能性の問題として捉えられる[7]。定理 4 にはこの二つ

の水準が含意されているのである。これは、定理5についても同様に言える。

また、このことは定理4から定理6への移行の問題にも答えることになる。前節で指摘したとおり、この二つの定理の間では、「事物の本質を取り除く」から「事物の実在を取り除く」への表現上の移行と、それに伴う内容上の移行が問題となっていた。しかし、この問題もまた、定理4における二つの意味の本質を区別することで答えることができる。定理4で言われる「事物の本質」には、実在に対する本質と、実在の本性としての本質の二つが含まれていたが、定理6で参照されているのは、実在の本性としての本質の方である。これを論拠とすれば、定理6証明のように、「いかなる事物も自らのうちにその事物の実在を取り除く何かをもたない」ことを導き出すことができる。というのも、それは「個物の実在の本性のうちに、その実在を取り除くものはない」ということに他ならないからである。このように考えれば、前節で提起した二つの問題は解消することができる。

以上をまとめれば、第3部定理4–6では、事物の本性と外的原因の対は、個物の本質のみからは導き出せないその実在を規定することから、個物の実在からその本性を取り出すことへとその役割を移行させているといえる[8]。個物における実在の本性としての本質を定式化したという点が、定理4–6の成果である。

4．人間の無力能の起源

最後に、第3部定理4–6で定式化された個物における実在の本性という発想が、『エチカ』全体の中でいかなる射程をもつのか、第4部定理5を手がかりに考えてみたい。以下がその定理である。

> 各々の受動の力とその増大、およびその受動が実在するのを保持することは、われわれが実在するのを保持しようとする力能によってではなく、われわれの力能と比較された外的原因の力能によって規定される。（E4P5）

まず、この定理の位置づけを確認しておこう。第4部は「人間の隷属と感情の力について」と題されているとおり、その主題は「諸感情を緩和し制御することにおける人間の無力能（impotentia）」（E4Praef）である。とりわけこの無力能の起源を解明することが、定理1–18の課題となる。その際、問題となるのは、人間の本性と無力能との関係である。そもそも人間の本性は神の本性の必然性から導き出されるものであり、その意味で人間の本性の中には何ら否定性はない。それに

もかかわらず、なぜ人間は感情に対して無力能なのだろうか。言い換えれば、なぜ神の力能を表現する人間の力能が無力能に転じるのかが、明らかにされなければならない。定理 5 で導入される「われわれの力能」と「外的原因の力能」の対は、このことを解明する上で、決定的な役割をもつ。

では、定理 5 では何が言われているのだろうか。それを理解するために必要な二つの要素をあらかじめ見ておきたい。一つは、「人間は自然の一部分である」という発想である。「諸事物の自然の中には、それよりも力能が大きく強力な他のものがないような個物はない。そうではなく、何らかのものがあれば、それよりも力能が大きい他のものがあり、それによってその何らかのものは破壊されうる」（E4Ax）。個物の力能は、神の力能をある一定の規定された仕方で表現したものである。個物としてのある人間が力能をもつのと同様に、他のあらゆる個物が力能をもっている。ところが、自然の中には無数の個物があり、それぞれ力能の大きさが異なっている。そのため、その人間の力能を上回る力能をもつ他の個物が無数に実在し、人間は常に自らの力能よりも大きな力能をもつ外的原因に脅かされることになる。ここに、人間の力能と外的原因の力能が比較される地平が拓かれる[9]。これが「人間は自然の一部分である」ことの意味である。このことは、定理 3 で次のように定式化される。「人間が自ら実在することを保持する力は制限されており、外的原因の力能によって無限に凌駕される」（E4P3）。

もう一つの要素は、受動の定義である。第 3 部定義 2 によれば、能動（actio）とは、われわれがある結果に対して十全な原因であること、言い換えれば、われわれの本性のみからその結果が導き出されることである。反対に、受動（passio）とは、われわれがある結果に対して非十全な原因であること、つまりわれわれの本性のみからはその結果が導き出せないため、われわれの本性だけではなく外的原因の本性も考えられなければならないことである。ここにもまた、事物の本性と外的原因の対が用いられている。だが、ここでいう「われわれの本性」とは何なのかはまだ規定されていない。その点で、これは形式的な定義にすぎない。

これら二つの要素を踏まえて、第 4 部定理 5 証明を見てみよう。

> 受動の本質は、われわれの本質のみによっては説明されえない（第 3 部定義 1 および定義 2 より）。つまり、（第 3 部定理 7 より）受動の力能は、われわれが自己の存在を保持しようとする力能によっては定義されえず、そうではなく（第 2 部定理 16 で示したように）われわれの力能と比較された外的原因の力能によって必然的に定義されなければならない。（E4P5D）

証明の要となるのは、「受動の本質」から「受動の力能」への移行である。まず、「受動の本質」ということで言われることは、単に受動はわれわれの本質のみからは導き出せないことである。これは受動の定義そのものであり、形式的な規定にすぎない。だが、この証明では、ここに第3部定理7を導入する。この定理は、前節で分析した第3部定理6を受けて、そこで取り出された個物の実在の本性を「現実的本質」として定式化するものであるが、その定理を導入することで、受動の定義は実在の水準に適用される。これが「受動の力能」への移行である。

では、実在の水準において受動であるとはいかなることであるのか。受動の定義によれば、受動とはわれわれの本質のみからは導き出せないことであったから、実在において受動であるとは、われわれの実在の本性、すなわちわれわれが自己の存在を保持しようとする力能のみからは導き出せないということである。ここには、われわれの力能との比較の地平において現れる外的原因の力能が必要である。そのため、受動は必然的にわれわれの実在の本性としてではなく、外的原因の力能によって規定される実在の変状として捉えられることになる。ここにおいて、受動は単なる形式的な規定という水準から、実在の本性と変状によって説明される水準へと移行される。以上が、「受動の本質」から「受動の力能」への移行として描かれたことである。

このことがなぜ人間の無力能の起源を解明する上で重要であるかといえば、第4部においては「受動」ということで、もっぱら受動としての感情が考えられているからである。前述の定理5を感情の問題に適用すれば、人間が受動としての感情に囚われるのは、人間の実在に対する本質や、実在の本性としての本質に何か否定的な規定があるからではない。そうではなく、人間の実在の変状が必然的に外的原因の力能によって規定されているからである。つまり、人間は単に自己の実在の変状を自己の力能のみによっては規定できないという意味において、そうした力能をもっていない、すなわち無力能なのである。しかし、そうした無力能は、決して人間の実在に対する本質や、実在の本性としての本質に由来するものではない。あくまで外的原因の力能によって規定される実在の変状に由来する。このように、人間の無力能の起源を、人間の本性から人間の実在の変状へと移し替えることこそが、スピノザが『エチカ』第4部で試みたことなのである。

５．結論

本稿の論述をまとめれば、こうである。スピノザが初期からたびたび用いてき

た事物の本性と外的原因という対は、『エチカ』では二つの水準において用いられていた。一つは、実在に対する本質と本質に対する実在を区別する水準である。これは、第 1 部定理 8 備考に見られた水準であり、個物の本質のみからは導き出されえないものとして、個物の実在が規定された。もう一つは、実在の本性としての本質と実在の変状を区別する水準である。これは、第 3 部定理 4–6 に見いだされた水準であり、個物の実在のうちで、外的原因によって規定されるわけではないものとして、個物の実在の本性が取り出された。そのうえで、第 4 部定理 5 では、こうして見いだされた個物の実在の本性を、人間の受動の問題に適用することで、人間の無力能の起源を、実在に対する本質でも実在の本性としての本質でもなく、外的原因の力能によって規定される実在の変状に見いだした。このように、人間の本性から人間の実在へと分析の対象を変えていく点に、『エチカ』の思考の特質がある。これにより、感情論は実在する個物どうしの触発関係において成り立つ『エチカ』の個体論と結びつくことができるようになった。

以上のことは、哲学史から見れば、近世のモラリストとの対比の下で捉えることができる。というのも、リプシウスやシャロンらは、古代のストア主義の著作を引き合いに出しつつ、まさに人間の本性のうちに、感情に対する無力能の起源を求めようとしたからである。このことは、『エチカ』第 3 部序言の冒頭にも表れている。そこでは、人間の無力能をどう捉えるのかということについて、「感情や人間の生き方について叙述した人々の大半」が、次のように批判されているからである。

> 彼ら［＝感情や人間の生き方について叙述した人々の大半］は人間の無力能や恒心のなさの原因を自然の共通の力能に帰すのではなく、私には何のことか分からないが、人間の本性の欠陥に帰す。それゆえ、彼らはそうした人間の本性の欠陥を嘆き、笑い、蔑み、しばしばそうなるのだが、呪うのであり、人間精神の無力能をより雄弁により饒舌に誹ることを知っている者は、まるで神のように思われている。（E3Praef）

「感情や人間の生き方について叙述した人々の大半」は、人間が感情に対して絶対的な力をもっていると考えている。しかし、この考えは、感情に対する人間の無力能の原因をすべて人間の本性の欠陥に求めることと容易に結び付く。というのも、人間が感情に対して絶対的な力をもちうるにもかかわらず、感情に囚われるのであれば、それは人間の本性それ自体に欠陥があり、諸感情に対する絶対

的な力を失っているからだとしか考えられないからである。そのため、こうした人々は、人間本性における欠陥を「嘆き、笑い、蔑み、呪う」ことで、何事かを発見した気になっている。スピノザが批判するのは、まさにこの点であった。近世のモラリストが人間の本性に着目したのに対して、スピノザは人間の実在を分析することを通して、人間の本性に無力能の起源を求める思考に対抗したのである。これが『エチカ』の到達点の一つである。

したがって、ドイツのスピノザ研究者で、ドイツ語訳のスピノザ全集の訳者でもあるバルトゥシャットは、かつて『エチカ』を「人間の理論」と呼んだが[10]、彼に倣って言うならば、われわれは『エチカ』を「人間の実在の理論」と呼ぶべきであろう。

---

[1] スピノザの解釈史の中で、外的原因の概念を主題的に論じたのは、ラモンの研究がほぼ唯一である。ラモンは博士論文（Ramond 1995）で描き出した質／量の対と重ね合わせながら、内的／外的の対を次のように位置づける（Ramond 2007, pp. 73–88）。(1) スピノザの思考は、一方で外的なものの批判であり、外的原因を排除して、内的原因へと還元しようとするが、他方で内的なものの中からどのように外的なものが生じるのかを解明する側面もある。(2)『エチカ』では、外的原因が導入されることで感情論が展開されるが、第5部において外的原因が解消され、原因性が内的なものへと還元されることで、至福へと至る道が示される。(3) 他方、『神学政治論』や『政治論』では、外的なものが生じる表象のはたらきを明らかにすることで、神の表象や宗教上の儀式、法の支配等のメカニズムが解明される。だが、以上の解釈には、少なくとも二つの問題点がある。一つは、テキスト上の問題で、スピノザの著作では、「外的原因」は「内的原因」よりもむしろ「事物の本性」との対で導入されることが多い点である。そのため、外的原因という語が用いられているからといって、内的／外的という対に重点が置かれているとは限らない。もう一つは、外的原因の発想は、ラモンが挙げる例よりもはるかに多くの文脈で用いられている点である。それゆえ、ラモンのように、スピノザの思考全体を内的／外的の対でまとめ上げるのは無理があるように思われる。むしろそうした多様な例の水準がそれぞれどのように異なっているのか、一つずつ明らかにする必要がある。

[2] 外的原因の概念は、愛と憎しみの定義にも含まれている。「愛とは外的原因の観念を伴った喜びである」「憎しみとは外的原因の観念を伴った悲しみである」（E3AD6–7）。だが、これらを論じるには、表象における観念の役割を考察しなければならない。また、『エチカ』第5部における「感情の治癒」においても、感情を外的原因の思惟から切り離すことが論じられるが、これも観念どうしの秩序に関わる。いずれも本稿が論じる範囲を超えているため、ここでは扱わないことにする。

[3] これは、実在する事物には必ず実在する原因がなければならないという、スピノザ流の「充足理由律」である。別の箇所では、「各々の事物には、なぜ実在するのかというのと同様に、なぜ実在しないのかという原因ないし理由が割り当てられなければならない」（E1P11D2）とも言われる。定理8備考2でも、「20人の人間」の例の中で、「なぜ20人よりも多くもなく少なくもなく実在するのか」と問いを立てている点からいって、実質的には実在する原因だけでなく実在しない原因も想定している。

[4] Viljanen 2011, pp. 100–104.

[5] マシュレは、第3部定理4と定理5においては否定的に語られていたことが、神の力能を扱う第1部定理25系と第2部定理34と総合することで、第3部定理6において肯定的な表現で

語られるように転換することに着目する（Macherey 1995, p. 77）。この点でヴィルヤネンと同様の解釈といえる。他方、デラ＝ロッカの解釈はこれとは全く異なり、証明の後半のみに力点を置く。彼は「実在する事物には実在する理由がなければならず、実在しない事物には実在しない理由がなければならない」というスピノザ的な充足理由律が、第 3 部定理 4 から定理 6 に貫かれていることに核心を見いだし、第 3 部定理 4 のみから定理 5 と定理 6 が導き出される過程を再構成している（Della-Rocca 2008, pp. 137–153）。

[6] スピノザの著作の中では「実在の変状」という表現は用いられないが、ここでは「実在の本性そのもの」に対して、「実在の本性がある状態をもって持続や量を伴って現れたもの」を「実在の変状」と呼んでおく。

[7] マシュレもまた、第 3 部定理 4 の解釈をする際、典拠は示さないものの、「実在の本質」という表現を用いている（Macherey 1995, p. 77）。

[8] 『エチカ』第 3 部のその後の展開において、実在の本性と実在の変状の区別は、欲望の定義の中に書き込まれ、欲望の問題として論じられるようになる。第 3 部「諸感情の定義」において、欲望は次のように定義されている。「欲望とは、人間の本質が、何であれ与えられたその変状によって、何らかのことをなすように規定されていると捉えられるかぎりでの、その人間の本質そのものである」（E3AD1）。ここで言う「人間の本質そのもの」とは、個物としての人間が自己の存在を保持する力である「現実的本質」（E3P7）、すなわち人間の実在の本性である。だが、その人間の本質は、外的原因によって変状し、その変状によって何らかのことをなすように規定される。すると、人間の本質は、量を有し持続するものとして現れることになる。そのように外的原因によって規定されたかぎりでの人間の本質が、ここで「欲望」として定義されている。それゆえ、欲望の定義には、実在の本性と実在の変状という対が含意されている。

[9] この点は既にマシュレが指摘している（Macherey 1997b, p. 78）。

[10] Bartuschat 1992, pp. IX–XI.

［凡例］

スピノザの著作からの引用は、下記のゲープハルト版と PUF 羅仏対訳版を用いた。

Spinoza Opera, im Auftrag der Heidelberger Akademie der Wissenschaften (4 vols.), hrsg. von Carl Gebhardt, Heidelberg: Carl Winter, 1925.

Spinoza Œuvres, édition publiée sous la direction de Pierre-François Moreau, Paris: PUF, 1999–.

各著作の引用表記に関しては、『知性改善論』（略号 TIE）はブルーダー版の節番号、『短論文』（略号 KV）は部・章の番号とミニーニによる節番号、書簡（略号 Ep）はゲープハルト版の書簡番号、『エチカ』（略号 E）は以下の略号を用いて、例えば第 2 部定理 21 備考は E2P21S となるように示した。

P = Propositio　D = Demonstratio　C = Corollarium　S = Scholium　Praef = Praefatio
Def = Definitio　App = Appendix　AD = Affectuum Definitiones

［文献］

Bartushchat, Wolfgang (1992). *Spinozas Theorie des Menschen*, Hamburg: Meiner.
Della Rocca, Michael (2008). *Spinoza*, New York: Routledge.
Gueroult, Martial (1974). *Spinoza II : L'âme*, Paris: Aubier-Montaigne.
Macherey, Pierre (1995). *Introduction à l'Éthique de Spinoza III : La vie affective*, Paris: PUF.
——— (1997a). *Introduction à l'Éthique de Spinoza II : La réalité mentale*, Paris, PUF.
——— (1997b). *Introduction à l'Éthique de Spinoza IV : La condition humaine*, Paris, PUF.
Matheron, Alexandre (1969). *Individu et communauté chez Spinoza*, Paris: Minuit.
Ramond, Charles (1995). *Qualité et quantité dans la philosophie de Spinoza*, Paris: PUF.
——— (2007). *Dictionnaire Spinoza*, Paris: Ellipses.
Viljanen, Valtteri (2011). *Spinoza's Geometry of Power*, Cambridge: Cambridge University Press.